

精神看護学実習指導の検討 —学生の記述による学びの分析から—

Study of Psychiatric Nursing Practice Guidelines -Based on Students' Descriptions on Learning Activities-

酒井 美子, 土肥 しげ子, 松井 淳子

要 約

本研究は、精神看護学実習における学生の学びを把握することで、教員の指導方法について検討し、今後の実習指導の課題を明らかにすることを目的とした。対象は、本学看護学科3年生46名、前期の精神看護学実習終了後の「精神看護学実習で学んだこと」の記録をデータとして学びの内容分析を行った。その結果、22のサブカテゴリと、10のカテゴリが抽出された。そのうち「精神医療・治療の実際」「他者理解に向けた手段」「自己理解・自己洞察」「看護観・障害者観」「看護の役割の実際」「自己と他者との関係及び、相互作用」のカテゴリはいずれも50%以上の記述があった。最も記述件数が低かったのは、「患者の権利と人権」「疾患・症状の理解」であり、次いで「ソーシャルサポート」「看護の展開」であった。また、教員が期待する対象の生活背景、処遇に関する患者の心理面の記述はなかった。これらの内容分析から、①自分の感情を表出し自己を受容できる②実習に対する不安や精神障害者に対する偏見を軽減する③生活者として患者を捉えられる④地域精神医療、社会復帰支援の学びを深めるなどの、指導目標と指導課題が示唆された。

キーワード：精神看護学実習，実習指導，学び，内容分析

はじめに

本学での精神看護学実習の対象である学生は、20歳前半であり、まさにアイデンティティの確立の不安定な時期である。最近では、自分の感情を表現して、自ら他者と関わる学生は少なく、他者から自分に近づいてくれるのを待っている傾向がある。そして、学習においても気づきを自ら学習展開していく学生も少なく、教員、指導者の指示を待っていることも事実である。

臨地実習は学生一人ひとりの独自の体験的学習をもとに看護を体得していく。藤岡¹⁾は、臨地実習は授業とし、「知識技術の保有者であることにとどまらず、何が看護でなには看護でないかを、自分の力で探求し、自分なりの看護を見つけていく能力、態度、意志を育まなければならない」という。また「学習とは、学習者自身による経験の意味づけを通して導き出されるものとして、教員と学生の主体的・創造

的共同である」という。最近の学生の傾向を考え合わせると、学生はどれだけ気づきを深め、学びを内面化しているのだろうか。また、気づきや、1つの学びからどれだけ発展性のある学習とするのだろうか。

本研究は、精神看護学実習での学生の学びを分析し、次年度の実習展開方法の改善に役立てるために取り組んだものである。

研究方法

1. 研究目的

本研究の目的は、①精神看護学実習における学生の学びを明らかにすること、②実習展開方法と指導方法についての課題を具体化することである。

2. 対象および方法

対象は本看護学科3年生のうち前期精神看護学実習を終了した学生46名（平均年齢は21.1歳）のうち、男性6名、女性40名。学生が自由記述した「精神看護学実習で学んだこと」の記録を検討資料とした。学

生には研究の趣旨を説明し、記録物の活用の承諾を得た。そして、記録物は本研究以外では使用しないこと、研究後には、記録物は全てシュレッターで処分することを約束し、プライバシーの保護に努めた。

3. 分析方法

学生の学んだことの記録全体を文脈として、センテンスを分析単位とした。センテンスの表現、意味内容の類似性に基づいてカテゴリー化し、カテゴリー名を命名した。また、命名した項目について記入されている人数を集計した。意味内容の捉えにくい記述については前後の文脈から解釈した。また、指導教員の学生に期待する学びの項目と比較した。結果解釈については信頼性を得るために、複数の実習指導教員と、他の研究者の見解、検証を依頼し加えた。

4. 用語の定義

学び：内発的な動機を基に、自分の考えを深め時間的にも意識の中に残っているものとし、今回は文章で表現できたものを学びとして捉えた。

精神看護学実習の方法

1. 精神看護実習の目的・目標

目的：精神障害を持つ対象を理解し、精神医療における看護の役割を学び、問題解決に必要な援助能力を養う

目標：1) 精神障害を持つ対象の病気の特徴を学ぶ
2) 精神科における治療活動の実際を学ぶ
3) 精神障害を持つ対象に対する看護のあり方を学ぶ

実習内容：実習期間は、各グループ2週間の実習で、1グループ4～5名で行った。内容は、実習前には各グループの担当教員によるオリエンテーションを学内で行う。学生は1人の患者を受け持ち、1週目の金曜日には看護計画を立案し、2週目に実践し展開していく。プロセスレコードを2回とり、毎日カンファレンス(30分)を行い、学びの共有を行う。本研究対象の学生が受け持った患者の疾患は全て統合失調症であった。

結果

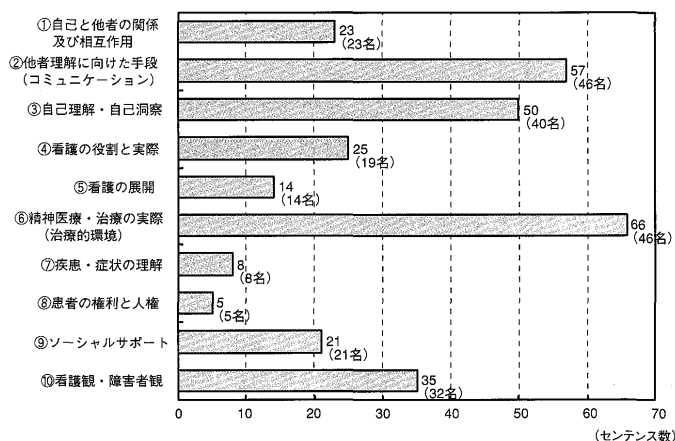
1. 学生の記述内容について

46名の598センテンスの学びの記述をカテゴリー化した。その結果、22のサブカテゴリーから、10のカテゴリーを抽出した。(図1)

図1は、各カテゴリーのセンテンス数と、記述人数を()内に示し、比較したものであり、センテ

ス数は一人の学生による複数の記述も含まれる。

図1 カテゴリーセンテンス件数〔記述人数〕n=46



「精神医療・治療の実際」に関する記述は最も多く、次いで『他者理解に向けた手段』『自己理解・自己洞察』『看護観・障害者観』『看護の役割の実際』『自己と他者の関係及び相互作用』『ソーシャルサポート』『看護の展開』と続き、『疾患と症状の理解』『患者の権利と人権』については最も記述数が少なかった。

①『自己と他者との関係』23センテンス(23名)で、言語的コミュニケーションを成立させることに重点が置かれ、対人関係、他者理解まで考える学生は半数であった。サブカテゴリーには「入院生活に関すること」(3名)「対象の理解に関すること」(10名)「対人関係に関すること」(10名)であり、記述の中には、(患者に拒否された)(一緒に時間を過ごすことで信頼関係がうまれる)(自然体の自分で関われば良かった)(人と人とのかかわりの難しさが分かった)などの記述があった。

②『他者理解に向けた手段(コミュニケーション)』は57センテンス(46名)で、「コミュニケーションの大切さ」(23名)「治療的コミュニケーション技法」(17名)「コミュニケーション技術」(17名)で(非言語的コミュニケーションが大切)(不安を与えない言動)(自己開示の大切さ)などの記述があった。コミュニケーションについてはほとんどの学生は躓き、コミュニケーションスキルの重要性を学んでいる記述内容であった。

③『自己理解・自己洞察』は50センテンス(40名)で、サブカテゴリーは「自己の気づき」13名「イメージの変化」37名の記述があった。具体的には(暗いイメージを持った自分が恥ずかしく思った)(自分自身を知る機会となった)(イメージをかえることは

できなかった) (自分の足りない部分に気づいた) などがあげられていた。イメージの変容に対する記述は多く、予想以上に学生は偏見や先入観を持って実習に臨んでいることが伺えた。

④『看護の役割の実際』25センテンス(19名)のサブカテゴリーは、「日常生活援助」に関する記述は10名、「観察の重要性」については8名、「看護判断の重要性」については1名、「看護の視点」に関する記述は6名であった。具体的には、(患者の言動には意味があることを学んだ) (見守りも大切な看護) (健康な面を引き出す看護が大切) (精神科看護の難しさを知った) などがあり、教員が期待する精神科看護の視点の学びが含まれていたが、記述人数は少ない。

⑤『看護の展開』14センテンス(14名)は看護過程に関するサブカテゴリーから、14名の記述があった。(目標を患者と一緒に決めていくことが良い) (その人にあった援助の提供が大切) (健康な側面をのばしていくことも看護援助となる) などがあげられ、看護過程の活用による展開の中で個別の重要性を捉えている。

⑥『精神医療と治療の実際』66センテンス(46名)は「治療の実際」46名「治療的環境」17名「チーム医療の大切さ」3名のカテゴリーからなり、内容には(患者の安全を守ることが大切) (薬物療法の重要性を学んだ) (SST・OTに実際に参加して学びが深まった) (プライバシーが守られていないことを知った) など実際の治療参加を通して記述されていた。

⑦『疾患・症状の理解』8センテンス(8名)は「疾患と症状について」のサブカテゴリーで、(症状の対処方法を学べた) (身近な疾患であることを知った) (他の疾患とは変わらない病気であることを知った) (それぞれに症状が違うことが分かった) などの記述があった。しかし、記述数は少なかった。

⑧『患者の権利と人権』に関しての学びについては5センテンス(5名)とかなり少ない。記述には(プライバシーが守られていない) (人として尊重する) (その人の自尊心を大切にすること) などがあった。実習要項には、権利擁護に関する目的目標をあげていない結果といえる。

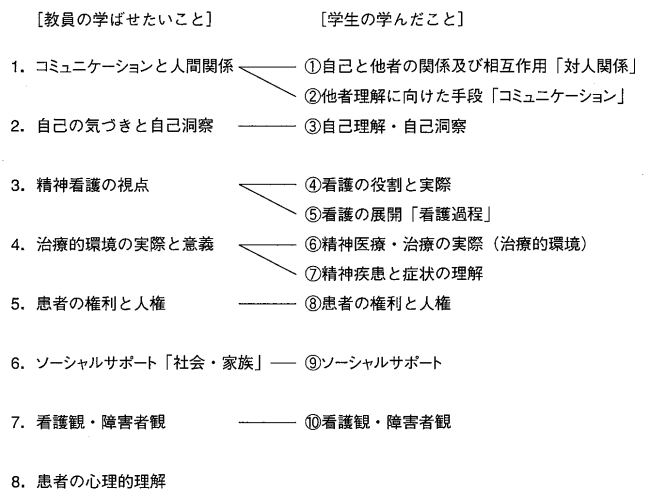
⑨『ソーシャルサポート』21センテンス(20名)のサブカテゴリーは「家族への関り」2名「社会との関係」については19名であり、半数も満たなかった。これは、受け持ち対象は全て慢性期であり、社会復帰施設の実習を学ぶ実習展開ではないことも誘因である。記述には、(退院後の生活を考えた看護の必要

性を学んだ) (社会から孤立しない関りが必要だ) (社会の偏見がある) (長期入院が及ぼす影響は大きい) などがあげられていた。

⑩『看護観・障害者観』35センテンス(32名)は、「看護観」について18名、「障害者観」について17名の記述があった。(あきらめない看護が大事) (相手に関心を持つ姿勢が大切) (焦らず待つことが大切) (人間対人間の看護である) (障害者ではなく一人の人として接する) など精神科看護の視点となる内容が含まれていた。

2. 教員が期待する学びと実際の学びの比較 (図2)

図2 教員の期待と学生の学びの関連



教員は患者の生活背景や長期の入院生活、処遇に関することから、患者の心理的理解を期待していたが、学びとして記述されてはいなかった。

考 察

各カテゴリーから指導方法を考える

1. 「自己と他者との関係」「他者理解に向けた手段・コミュニケーション」「自己理解・自己洞察」

ほとんどの学生は、情報を得ようとするあまりに、言語を求めて、質問が多くなり、患者の言葉数の少なさから焦りを感じる。情報を得るためのコミュニケーションから対人間として、お互いが知り合うコミュニケーションとなるには時間を要する。しかし、つまずきの体験や、プロセスレコードから、自分の性格傾向や学習傾向に気づき、非言語的コミュニケーションの大切さと、患者の言動の意味を考える機会を得ている。学生は、コミュニケーション技術に関する学びは多いが、コミュニケーションを通して、患者の心理的な理解や、疾患の特徴への発展的な学びの記述は少ない。また、自己の特性を知り、振り

返ることなしには、より良い看護には繋がらず、自己洞察する機会はとても大切であると考え、[自己の気づき]をしている学生は12名で、半数にも満たなかった。自己理解、自己受容までにはいたらず、他者を理解することは困難であったとも考えられる。傷つきやすい現在の学生は、自分の感情を素直に表現することに抵抗を感じており自己防衛が強い学生が多いようである。鈴木²⁾は、「学生への教育で大事な点は、自分の感じたこと、言いたいことを率直に相手に伝えることが出来る、また、建設的な方向で話し合える能力を育てていくことである」と言っている。まさにこれは精神看護学実習の場で学ぶ機会が多い。これについては、学生が自分の感情を表出しやすい環境と、他者から肯定的なフィードバックされる体験で、自己を受容していくことが大切であると考え、毎日行われるカンファレンスを有効に活用すること、SST (Social Skill Training) を学内実習時に取り入れることを考えた。

イメージの変化についてはほとんどの学生は記述しており、精神病棟、精神障害者への偏見・不安の大きさを意味している。柳川³⁾は「不安・偏見が大きいと患者と向き合う姿勢が消極的になって『看護計画や活動の創意・工夫』『自己決定ができる働きかけ』もできにくい傾向がある」といっているように、学生は、偏見や恐怖感が大きすぎて、患者を知ろうという意欲、行動への積極性にかけることが、患者の心理的理解までいたらなかったと考えられる。精神看護学実習に対する学生の不安や、精神障害者に対する偏見をいかに軽減させ、実習に望めるようにするかはこれからの課題であり、精神障害者の当事者による授業を組む、実習オリエンテーションをより具体的な実習内容と実習展開の説明を行うなどを考えた。

2. 「看護の役割と実際」「看護の展開」

いずれも学びとして記述している人は少ない。精神看護は目に見える技術的なものではなく、対象との人間関係形成のプロセスの中に存在し、評価もしづらいものである。時に学生は、「何も援助していない」と表現する。患者を病気の視点で捉え、症状の改善を期待するのである。生活者としての視点で患者を捉え、生活上の困難さ、生活のしづらさをどのように補うか患者と一緒に考えていくプロセスを体験して欲しい。柳川⁴⁾は、「学生が他科における看護過程と同様な展開を考えて精神科看護実習に臨むならば場合によっては患者との溝を深めてしまうこと

になりかねない」と指摘している。それに加え、問題解決思考での看護過程では疾患から患者を捉えてしまう。私たち指導教員の考える精神看護の視点は、ア. 障害、疾患を重視するのではなく、その人の健康面を引き出す イ. 生活者の一人として捉える ウ. 施設のなかでの患者ではなく、地域社会の広い視野で患者を捉えること、である。患者の自己決定を支え、患者と共に考え展開していける看護過程を期待する。目標達成思考に基づく看護の実践を行い自分の看護を見つめ、個別性を考えられる実習であるよう、実習の目標設定を見直していくことは大きな課題である。又、記録物からの情報は重視せず、患者の生活行動や体験、症状を学生の五感で観察し、患者に関心を示し自ら情報を得る努力をする。その為、初日から患者の生活の中に入り一緒に行動する指導方法を考える。

3. 「精神医療・治療の実際」「疾患・症状の理解」「ソーシャルサポート」

精神医療・治療では、作業療法・SST・レクリエーション・服薬管理などに参加、見学し、治療の実際を学びとしている。また、疾患、症状が生活にどのような影響をもたらしているかを考える学生もいた。しかし、生活のしづらさや、入院の意味、医療の歴史的な問題や、患者にとっての処遇問題に関心を持った記述は少ない。疑問を感じることなく目の前で行われている看護、医療をそのまま受け入れてしまう学生の傾向が伺える。又、社会復帰支援、ソーシャルサポートシステムなどの学びは少ない。これに対しては、今後は医療の変遷に伴い、精神科救急、社会復帰支援の学びとなる実習展開を検討していかなければいけない。とりあえずは、実習中に社会支援体制の実際や、家族、患者への関りなどについて、PSW (精神保健福祉士) の方から話しを聞く機会を実習展開の中に計画することを考える

4. 「患者の権利と人権」

学びとして記述している学生は5名と、かなり少ない。実習目標に掲げていない結果といえるが、人権、権利は自分たちの生活の中では保障されており、人権問題にさらされることもなく生きているゆえ意識されにくい。また、看護の実際のなかで展開することも少ない。実際には他の領域よりも人間の人権・権利について考える教材はたくさんある。施設、私物の制限など、閉鎖的な生活環境をどのように受けとめているのか。教員の発問にある学生は、「しょうがないと思う」の一言で済ませていた。鈴木²⁾は、

「学生が精神科を特殊であると固定的な認識を持つあまりに、現状の問題を自分で考え、判断することを避ける傾向にあることは大きな問題」というスタッフの意見を取り上げている。学生の偏見や恐怖感、患者の実際の生活環境の受け止め方も歪めてしまい、患者心理を理解しようとする情動を抑制しているとも考えられる。患者の人権から、患者心理への視点に繋がられる教授方法を考えていくことは大きな課題といえよう。

5. 「看護観・障害者観」

学生は実習を終えて、精神看護とは何かを振り返り、2週間という短い実習期間の中での体験を通して、目に見えない精神看護の展開から、疑問を持ち、自分なりに看護の意味づけをしている。様々な角度から患者を捉えていくことの重要性や、患者の健康な部分、持てる力を引き出す援助の重要性に気づいている学生もいる。

われわれ指導者の役割は、学生の主体的に学ぶ姿勢と、能力を揺さ振り、もてる力を認め、それを支えていき、更に発展できる学びへと導くことである。そのためには、指導者自身が自分の傾向を知り、学生に関心を持って指導者—学生関係を築いていくプロセスを大事にすることが必要である。そして、学生への関りは、患者関りのモデリングとなるような姿勢で、学生と向き合うことが大切である。患者との関りのみならず、スタッフの患者への関りや、教員の学生への関りのなかからも、学生は自分の看護観を模索し深めていくものであり、学生への関りを日々振り返ることは継続課題である。

まとめ

精神看護学実習での学生の学びの分析から、以下のことが明らかになった。

1. 学生の学びの内容として、①『自己と他者との関係』②『他者理解に向けた手段・コミュニケーション』③『自己理解・自己洞察』④『看護の役割と実際』⑤『看護の展開』⑥『精神医療・治療の実際』⑦『疾患・症状の理解』⑧『ソーシャルサポート』⑨『患者の権利と人権』⑩『看護観・障害者観』が抽出できた。
2. 新たな指導目標と課題
 - 1) 感情を表出し自己を受容できる
 - ①カンファレンスの勧め方、内容の検討
 - ②学生対象のSSTを学内実習時に取り入れる
 - 2) 実習に対する不安や、精神障害者に対する偏見

を少しでも軽減できる

- ①精神障害者の当事者による授業を組む
- ②実習オリエンテーションでは、精神障害者・家族の心理面への関心を高める発問を取り入れる
- 3) 対象を生活者として捉えられる
 - ①実習の目標設定を見直していく
 - ②記録物からではなく、まずは対象の生活の中から情報を得ることを重視する
- 4) 地域精神医療、社会復帰支援の学びを深める
 - ①PSWの話しを実習展開の中に計画する
 - ②社会復帰施設の実習展開を検討する

限界

今回の研究対象の学生は、前期の実習後の学生のみであることと、文章の表現には限界があり、文章化できたものだけを学びの対象としたことである。

おわりに

様々な体験を通して学びえるものは千差万別であるが、個々の学生が効果的な学びを得るには、学生のレディネスと指導のあり方、そして、実習環境は大切な要因である。精神看護は、人間関係の構築の中に存在し、臨地実習では、自分を見つめ、新たな自分を発見できる場である。現在の学生の傾向を理解し、学びを一層深められるよう、今回の研究で得た課題を次の実習指導で実践し、さらに検討を重ねていきたい。

引用文献

- 1) 藤岡完治ら：臨床実習指導ワークブック第2版。医学書院（東京）、44-53、2001。
- 2) 鈴木啓子、渡辺暢子：臨床経験のない教員にとっての実習指導のこつ。看護教育、43（7）：527-531、2002。
- 3) 柳川育子：精神科看護実習における学生の意識変化をもとにした実習展開の検討。看護教育、39（5）：380-385、1998。
- 4) 柳川育子、柳川和夫：生活者の視点を重視した精神科看護実習の展開。看護教育、42（2）：110-113、2001。
- 5) 滝下幸栄、山田京子：精神看護実習における学習内容の評価。京都府立医科大学看護学科紀要、12（1）：55-63、2002。
- 6) 金城祥教：精神看護実習教育とその課題。看護

- 教育, 43 (7) : 520-525, 2002.
- 7) 杉山喜代子ら：臨床実習における学びの様相。看護研究, 31 (3) : 39-53, 1998.
- 8) 入澤友紀, 二渡玉江：精神看護学実習における学生の「学び」の分析。群馬県立医療短期大学紀要, 9 : 65-72, 2002.
- 9) 横田碧：精神看護学実習教育-精神科看護実習を通して学生たちは何を学んでいるか-。保健の科学, 39 (6) : 379-383, 1997.
- 10) 坂田三允：新しい時代の精神看護—心のケアの担い手を育てる—。看護教育, 41 (2) : 12-16, 2000.

Study of Psychiatric Nursing Practice Guidelines -Based on Students' Descriptions on Learning Activities-

Yoshiko Sakai, Shigeko Doi, Junko Matsui

Abstract

The purpose of this study is to explore teaching methods and clarify the issues of how to guide students in nursing practice settings in the future by comprehending how and what students learned from the psychiatric nursing practices. Forty-six senior students of this department were subjected to this study. The subjects were asked answer the questionnaire of "What you have acquired from the psychiatric nursing practices" and the analysis was conducted based on the questionnaire.

The results were sorted into 22 subcategories and 10 categories. The students answered 50% either of following categories, [Psychiatric treatment ? reality of treatment], [Procedure for how to understand others], [Self understanding ? self insight], [Concept of nursing ? concept of handicaps], [Reality of nursing role], [Relation and interaction between oneself and others]. The categories for which the students least answered were [Patient's right, human right] and [Understanding of disorder and symptoms], followed by [Social support] and [Dissemination of nursing]. However, the answers for the subjects' backgrounds and how patients perceive the way they are treated could not be obtained, which teachers expected to know.

The outcomes of this analysis suggest following teaching objectives and assignments to facilitate students' learning process; (1) To guide students to acquire skills to express feeling and accept themselves, (2) To minimize anxiety against nursing practices and prejudice against psychiatric patients, (3) To guide student to acquire skills to regard patients as livers, and (4) To expand the learning activities in the community psychiatric treatment center and social rehabilitation support settings.

Keywords: Psychiatric nursing practice, Guidelines for practice, Learning activities, Content analysis